様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２４ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ００４１２

研究課題名（和文）エズラ・パウンドの「辺境」意識：その変遷と儒教およびファシズム

研究課題名（英文）Ezra Pound's "Frontier": His Changing Stance and Confucianism and Fascism

研究代表者
長畑　明利（Akitoshi, Nagahata）

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：９０２０８０４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、アメリカのモダニズム詩人エズラ・パウンドの東アジア関連作品及び評論等に見られる「辺境」意識の変遷とその変化の意味を明らかにすることを目的とした。研究の結果、「キャセイ」（1915）や「中国詩篇」（1940）には、中華思想を内在化した、中央の視点から辺境を見る態度が顕著であるが、晩年の「納西詩篇」（1959、1969）では、辺境の少数民族の視点が前景化されていることが示された。この変化はパウンドの強大な政治権力に対する態度の変化を示唆する可能性がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、パウンドの東アジア関連作品に見られる彼の「辺境」意識の変遷を明らかにし、その変化とパウンドの強大な権力やイデオロギーに対する態度（ファシズム支持および儒教への傾倒）との関連を指摘するものである。本研究により明らかになったパウンドの「辺境」意識の変化は、彼の思想・宗教的信念の変化を示唆するものであるが、その変化が東アジア関連作品の特徴に見出されることの指摘は、パウンドの文学と思想における東アジアの重要性を示唆する重要なものである。「納西詩篇」の再解釈を伴う、本研究の成果は、パウンド研究のみならず、アメリカ文学及びモダニズム文学一般の研究のさらなる進展に貢献するものであると考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to show how in his poetry and prose about East Asia American Modernist poet Ezra Pound changed his stance toward the idea of the Frontier. The study shows that in Cathay, published in 1915, and The Chinese History Cantos, part of Cantos LII - LXXI, published in 1940, Pound presents a prominent Sinocentric view of the Frontiers, but in the " Naxi Cantos," included in the Thrones (1959) and Drafts and Fragments (1969), he shares the viewpoint of the minority group living in the Frontier. This change in the way of representing the Frontier suggests a shift in Pound's attitude toward a strong political power.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：パウンド　辺境　納西族　儒教　ファシズム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

(1) 研究代表者は、20 世紀前半のモダニズム詩人とその創作原理に見られる「抽象」の関係を検証する研究を進めてきた。2005 年度までに行った Gertrude Stein、Wallace Stevens、Hart Crane、T. S. Eliot に見られる抽象観についての研究に続き、2006 年度からは、Ezra Pound に関する研究に移り、「漢字的抽象」に基づく「表意文字的手法」の成立における能体験の役割について（2006～07 年度）、「表意文字的手法」と儒教受容およびファシズム支持の関連について（2008～10 年度）、経済学的関心と創作原理の関連について（2011～13 年度）、アメリカ建国の父祖および「高利」批判への関心と創作原理の関連について（2014～17 年度）の研究を行ってきた。本研究はこれらの研究をさらに発展させるために構想された。

(2) 本研究が対象とした主たる問題領域は次の通りである。

① パウンドの辺境意識と辺境の描写

1908 年にアメリカを去ってヴェニスに渡り、同年ロンドンに移ったパウンドは、1910 年代に発表した「我が祖国」（1912、13）「偏狭さは敵」（1917）をはじめとする評論や書簡で、文明の中心地ロンドンと辺境の地アメリカとの優劣を論じた。しかし同時に彼は、新興芸術の発展による「第二のルネッサンス」を興すことによって、また、それを辺境の地に興すことによって、両者の格差を無効化することができると力説した。これらの評論や書簡に見られるパウンドの辺境意識および辺境への関心は、その後の彼の詩と詩論においても継続されていく。たとえば、Ernest Fenollosa のノートに基づく漢詩の翻訳を収録した『キャセイ』（1915）には、辺境に派遣された兵士の述懐を記録する詩や、故郷を離れて辺境の地を訪れる商人を題材とする詩が含まれているし、『詩篇』には、紀元前 6～5 世紀のカルタゴの航海者 Hanno による西アフリカ沿岸航海の記録を題材とする「詩篇 40」が含まれている。「中国詩篇」（詩篇 52-61）では、モンゴル、チベット、日本、朝鮮など、中華文明圏の外部もしくは周縁部の歴史が紐解かれ、外部騎馬民族との攻防や、清時代のロシアとの国境画定の交渉などの歴史エピソードが現れる。「削岩機詩篇」中の「詩篇 94」では、西アフリカのソニンケ族の神話が取り上げられ、『詩篇』の最後の 2 セクションとなる「玉座詩篇」と「草稿と断片」には、中国雲南省の少数民族納西族の地理・文化を題材とする詩篇が含まれている。『詩篇』中で用いられたパウンドの造語 periplum（周辺航海）は、自身の境遇を踏まえた故国喪失者の視点を示すものであると同時に、こうした辺境の地をつなぐ視点を提供するものとして理解することができる。

②「辺境」をめぐる二つの視点

こうした辺境を扱う詩作品には二種類の視点を認めることができる。1910 年代の『キャセイ』や、30 年代後半に執筆された「中国詩篇」では、辺境地域は文明圏の中心から敵対的に眺められるが、晩年の「納西詩篇」では、辺境地域は文明の中心部からではなく、まさに辺境地域からの視点で、その土地や文化への共感を示しつつ描かれる。前者において、辺境は文明圏を形成する理念、制度、法などを脅かすものとなるが、後者において、それは自然、情緒、生命などの価値を付与される傾向にある。この視点の相違については多角的な検討が必要であるが、本研究はパウンドのファシズム支持と儒教への傾倒との関連のもとに、この問いについて考察する。

パウンドは 1930 年代に入るとファシズムへの傾倒を深め、また、並行して儒教の古典テクストを学び、経世済民の教えに対する共感を強めていった。それは現代社会における政治・経済面での混乱に対する「秩序」の回復をもたらすものとして、また、かつてのルネッサンスに比する

新たな文芸・芸術復興を可能にする安定した社会を維持するものとして、パウンドが時代錯誤的に希求したものと言える。「中国詩篇」のソースが、清朝におけるフランス人宣教師 de Mailla による『中国史』（*L'Histoire générale de la chine*）であり、同書が朱子（朱熹）編纂になる『資治通鑑綱目』に基づくものであることが示すように、「中国詩篇」における辺境へのまなざしは、儒教に内在化されたと考えられる中華思想を受け継ぐものであり、その姿勢には、間接的に、彼のファシズムへの共感とも連動しているものと考えられる。一方、「納西詩篇」のソースである Joseph Rock の *The Ancient Na-khi Kingdom of Southwest China* (1947) は、そうした中華思想および儒教的秩序観からは自由であると考えられ、納西族の文化を取り上げた「納西詩篇」においても同様の傾向が示されているものと想定される。本研究はソース・テクストの検討を含む文献調査により、この点を検証する。

これに加え、パウンドの詩に見られる辺境に対する二種類の視点が明確な二項対立をなすか否かについても検証が求められる。本研究は、文献調査によって、「中国詩篇」の辺境表象における儒教的秩序観と中華思想を突き崩す要素の有無について検討し、また「納西詩編」については、辺境の文化への着目と儒教的秩序観の関係を解明することを目指した。

本研究は、これらの調査・考察を踏まえて、パウンドの辺境意識の変遷とその背景にある彼の秩序観の関係を解明し、また、「納西詩編」の再評価を試みるものである。パウンドの東アジア関連作品を対象に、彼の「辺境」意識の変遷とその変化の政治的意味を検討し、また納西詩篇の再評価を試みる本研究は、パウンド研究、アメリカ文学研究に新たな貢献をなすことを目指すものである。

(3) 先行研究

パウンドの詩と詩論を「辺境」に注目して論じる本格的な研究は管見の限りまだない。ファシズムとの関係についての研究、パウンドと儒教との関係については、たとえば、Tim Redman, *Ezra Pound and Italian Fascism* (1991)、Feng Lan, *Ezra Pound and Confucianism* (2005) などがあるが、いずれも「辺境」を主たるトピックとするものではない。「玉座詩篇」と「草稿と断片」収録の「納西詩篇」については、*Ezra Pound and China* (2003) 所収の Emily Mitchell Wallace, "'Why Not Spirits? -- 'The Universe Is Alive': Ezra Pound, Joseph Rock, the Na-khi, and Plotinus" をはじめとする研究があるが、「辺境」の観点から他の時代の事例との比較を踏まえているわけではない。（本研究開始後の 2021 年には Duncan Poupard, *Translation/re-Creation: Southwest Chinese Naxi Manuscripts in the West* が出版されたが、同様に、パウンドの辺境観を論じるものではない。）

２．研究の目的

(1) 上述の問題領域を研究対象とする本研究の目的は主として次の 3 点である。①主としてパウンドの東アジア関連作品に見られる彼の「辺境」意識の変遷を明らかにすること、②その変遷の意味をパウンドの儒教への傾倒とファシズム支持に照らして考察すること、③『詩篇』の「玉座詩編」と「草稿と断片」に現れる「納西詩篇」の意義を明らかにすることである。

(2) より広い見地に立てば、これらの目的は、アメリカのモダニズム詩一般に窺われる美学的関心（「抽象」「併置」を鍵語とするもの）とモダニズム詩人たちの思想的、政治的関心との関連について検討する、より包括的な研究目的の一部である。

３．研究の方法

(1) 本研究は、主として文献調査によって遂行した。上記の目的を達成するため、本研究は、①

パウンドの 1910 年代の評論と書簡、②漢詩の翻訳に基づく詩集『キャセイ』、③『詩篇』中の「中国詩篇」、④同「草稿と断片」を対象とする文献調査を実施して、そこに見出される辺境表象について検討することとした。

(2)「納西詩篇」に関しては、当該詩篇の調査に加え、そのソース・テクストである Joseph Rock, *The Ancient Na-khi Kingdom of Southwest China* の分析を行うこととした。なお、文献分析を補完するために、関連するロックの他の業績についての調査を行う計画であったが、新型コロナウィルスの蔓延の影響で断念した。

４．研究成果

(1) 研究の結果、以下の知見を得た。

① パウンドの東アジア関連詩に現れる「辺境」意識の変遷とその意味

パウンドは 1915 年の『キャセイ』では、辺境に派遣された兵士や、故郷を離れて辺境の地を訪れる商人の感慨を描く詩の翻訳を行い、また『詩篇』収録の「中国詩篇」では、ドゥマイヤの中国史を用いて、辺境地域から中国内部への侵入をもくろむ外部騎馬民族との攻防を内部側から描いた。いずれも華夷の構図の中で、中央から周縁を見る描き方と言える。これに対し、晩年の「納西詩篇」では、周縁の少数民族の世界を、まさにその民族が生きる周縁の地からの視点で描いている。

② 辺境の扱いの変化と儒教・ファシズム

この変化は、パウンドの儒教思想への距離を反映するものと考えることができる。パウンドは『キャセイ』や「中国詩篇」の執筆において、そのソーステクストである中国の古典文学や儒教のテクストを受け入れ、そこに示される中華思想を作品中で反復した。そこには、政治を託された権力者が国民の安寧のために国を正しく律するという儒教思想へのパウンドの傾倒を見ることができる。（政治を託された権力者による正しい政治への期待は、パウンドにとって、ムッソリーニ支持とも連動するものであったと考えることができる。）一方、晩年の「納西詩篇」では、視点が権力者が占める国の中央ではなく、被支配者が住む周縁部に置かれている。このことは、パウンドが中央に位置する為政者が周縁を支配するという構図から離れつつあることを示唆する。

③ 二項対立の曖昧化

しかし、「中国詩篇」においても、中華思想に基づく中央と周縁の二項対立を突き崩す箇所は見出される。「中国詩篇」収録の、清の康熙帝の治世を扱う「詩篇 60」に描かれる、ガルダン戦争時の皇帝の外征の記述はその顕著な例である。満州族の征服王朝である清についての記述において、かつては脅威として捉えられていた外敵と緊張感に満ちた場所であった北東部辺境地域が、その脅威の側面を除外されたものとして描かれている。このことは、儒教の華夷秩序言説の一解釈（辺境の者も中央の存在となることができる）にも通じる記述である。

④ 「納西詩篇」の意義

「納西詩篇」はパウンドが中華の視点から離れて、辺境を描いた作品だが、これらの詩篇には、納西族の居住地に見られる自然風景が印象深い言葉で書かれており、そこには「牧歌」の要素を見て取ることができる。納西族居住地の自然の描写は、納西族の儀式の描写とともに、西洋近代における政治に関するトピックと併置されており、そこには西洋社会批判の要素を見ることができる。

⑤ 「納西詩篇」と探検のモチーフ

一方、「納西詩篇」はパウンドが『詩篇』において繰り返し取り上げた「探検」のモチーフと

も関連する。『詩篇』において、陸路、海路、空路によって、未開の地とおぼしき場所へ向かう探検者たちは、ときには征服者ともなるが、その軌跡は文明の中心から非文明の世界への参入と見なすことができる。この性格付けは、Frederick Jackson Turner のフロンティア史観と共通するものでもあるが、「納西詩篇」を少数民族にとっての外部者である者（ロック、パウンド）がその民族の内部に侵入し、その視点を担ったと考えることもできる。

これらの知見は、おおむね当初の仮説に沿うものであった。研究成果は、共著の一部として、また、学会講演および論文の形で発表した。

(2) これらに加え、パウンドの詩作一般について以下の知見を得た。

① パウンドと人的ネットワーク

パウンドは「中国詩篇」執筆の際に、日本の北園克衛らの知人と交流し、必要な情報を得た。一般には、彼の儒教への傾倒もファシズム支持も知人たちの理解を得られたわけではなかったが、パウンドは遠方にいる者も含む少数の理解者を求めたと考えられる。『詩篇』には、さらに、未来に現れる自身の思想と政治的関心の理解者を想定して書かれているとおぼしき箇所がある。この点については、さらなる調査検討が必要だが、研究成果の一部を、2021 年に開催した国際エズラ・パウンド学会にて発表した。

② 辺境としての日本、朝鮮半島

本研究では、東アジア関連詩のうち、主として北方、西方の辺境を表象する作品を取り上げたが、「中国詩篇」には、日本、朝鮮半島を含む東アジアの国際関係も描かれている。とりわけ、豊臣秀吉の朝鮮出兵をめぐる記述は、明時代の辺境の表象に関する問題を提示している。この点に関して、情報ソースの特定、翻訳の問題等に焦点を絞り、2023 年度開催の国際エズラ・パウンド学会にて発表した。

③ 『詩篇』におけるハミルトン

パウンドのアメリカ建国の父祖たちへの傾倒については、2011～13 年度の研究で取り扱ったが、そこで扱うことのできなかったアレグザンダー・ハミルトンもまた『詩篇』における「高利」の問題に関して、重要な位置を占めていることが明らかになった。この点について、国内の学会にて発表した。

(3) 本研究によって、①パウンドの東アジア関連作品に見られる「辺境」意識の変化を明らかにし、②その変化がパウンドの儒教言説（および強力な権力を有する者への信奉）からの距離を示唆することを示し、③「納西詩篇」の意義を明らかにする、という本研究の主たる 3 つの目的はおおむね達成したものと考える。（ただし、②におけるファシズムとの関連については、問題が大きいだけに、さらなる検討が必要であり、また、③におけるジョゼフ・ロック本人に関する研究は新型コロナウィルス蔓延の影響により不十分なものとなった。）今後、補足的な調査・検討を踏まえた上で、研究の成果を論文・口頭発表の形で発表していく計画である。

一方、パウンドと人的ネットワークについて、明時代の辺境としての日本・朝鮮半島の扱いについて、『詩篇』における歴史記述の翻訳の問題についてなど、本研究によって新たな研究の発展の可能性が生まれた。これらの点についても、さらなる研究を行い、その成果を論文、研究発表によって公開していく計画である。

パウンドの辺境意識についての研究は、彼の政治的関心と創作原理に関連する、また、彼の国籍喪失者としての生き方とも関係する重要なトピックである。その研究は、パウンドの東アジアの歴史・文化への関心についての研究、および、思想的・政治的人的ネットワーク形成の研究との関連のもと、今後さらに発展させていく必要がある。それにより、アメリカのモダニズム詩人と革新的創作原理との関連についての研究をさらに進展させることができるはずである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 長畑明利	４．巻 31
２．論文標題 辺境のパウンド、エリオット	５．発行年 2020年
３．雑誌名 T. S. Eliot Review	６．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 長畑明利	４．巻 22
２．論文標題 アメリカ文学とミシシッピ川ーー神話と距離	５．発行年 2020年
３．雑誌名 フォークナー	６．最初と最後の頁 52-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 長畑明利	４．巻 21
２．論文標題 Post-truth vs.「言語詩」ートランプ時代の前衛詩	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Ezra Pound Review	６．最初と最後の頁 57-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 長畑明利	４．巻 23
２．論文標題 終末の詩人ボブ・ディランー救世主イエスを信じるユダヤ人の視点から	５．発行年 2019年
３．雑誌名 港（ナマール）	６．最初と最後の頁 2-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　4件／うち国際学会　7件）

１．発表者名 Akitoshi Nagahata
２．発表標題 Composition with History as a Legacy: Reading the Historical Account of Hideyoshi in Canto 58.
３．学会等名 30th Ezra Pound International Conference（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Akitoshi Nagahata
２．発表標題 Thy True Heritage: The Future of Pound Studies -- An Open Discussion
３．学会等名 30th Ezra Pound International Conference（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 長畑明利
２．発表標題 Ezra Pound, The Cantos における Alexander Hamilton 批判ーー高利と決闘
３．学会等名 日本英文学会第95回全国大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 長畑明利
２．発表標題 Wallace Stevens の “An Ordinary Evening in New Haven” における「最高ならざる虚構」
３．学会等名 日本英文学会中部支部第74回大会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Akitoshi Nagahata, John Gery, Marjorie Perloff, Zhaoming Qian, Robert von Hallberg
２．発表標題 “Old Friends the Most" II: Modernist Friendships: A Roundtable Discussion
３．学会等名 29th Ezra Pound International Conference（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 長畑明利
２．発表標題 エズラ・パウンドの「表意文字的手法」再考 ――『詩篇』における通貨交換のチーフと「割符」
３．学会等名 上智大学アメリカ・カナダ研究所 Colloquim（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Akitoshi Nagahata
２．発表標題 Walt Whitman's Underwater Vision
３．学会等名 Blue Humanities: Anglo-American Literature/Culture and the Aquatic Environment（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 長畑明利
２．発表標題 ミシシッピ川とアメリカ詩――神話と距離［シンポジウム報告］
３．学会等名 日本ウィリアム・フォークナー協会第22回全国大会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Akitoshi Nagahata
２．発表標題 Post-war Reception of Ezra Pound in Japan
３．学会等名 28th Ezra Pound International Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 長畑明利
２．発表標題 辺境のパウンド、エリオット（講演）
３．学会等名 日本T．E．エリオット協会第32回大会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Akitoshi Nagahata
２．発表標題 Questions of Travel in the Works of Elizabeth Bishop and Yoko Tawada
３．学会等名 アメリカ学会年次大会（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Akitoshi Nagahata
２．発表標題 John Ashbery’s Haiku and Haibun
３．学会等名 Anglo-American Literature/Culture and Japan（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

1．著者名 Akitoshi Nagahata, Richard Parker (editor), et al.	4．発行年 2023年
2．出版社 Clemson UP	5．総ページ数 256
3．書名 Readings in the Cantos, Volume 2	

1．著者名 Mark Byron (editor), Akitoshi Nagahata, et al.	4．発行年 2019年
2．出版社 Cambridge University Press	5．総ページ数 289
3．書名 The New Ezra Pound Studies	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計3件

国際研究集会 29th Ezra Pound International Conference	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 The Steppe in Modern and Contemporary Literature: A Special Lecture by Dr. Mark Byron	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 American Poetry: Border-Crossing and Peace	開催年 2023年～2023年

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関